

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第27号

発行日 2012年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2012年度 部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史 in 西三条

壬生地区に関わる歴史についての講座を開催します。ふるってご参加ください。

第1回 6月15日（金）

「北小路村物語 西土手の御役目をめぐって」

講師：辻 ミチ子さん（元京都文化短期大学教授）

第2回 6月29日（金）

「壬生地区における「同和問題」の形成過程と同和对策事業の特徴」

講師：山本 崇記さん（立命館大学非常勤講師）

\* \* \* \* \*

時 間 午後6時30分～8時30分

場 所 中京いきいき市民活動センター 会議室（旧壬生コミュニティセンター）

京都市中京区西ノ京新建町3 TEL：075-802-1301

地下鉄西大路御池駅から徒歩2分

詳しい地図は当資料センターホームページに掲載しています

参加費 無料

～参加希望の方は当資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

本の紹介

秦重雄著

『挑発ある文学史』

誤読され続ける部落／ハンセン病文学史

前川 修

(地域福祉センター希望の家)

はじめに

著者の秦重雄氏は「まえがき」で、「部落問題文学」について、「何人かの先人達が耕した周知の作品研究が既に存在する。しかし、筆者は同一・同類の語彙で繰り返して語られるその研究成果の一部に強い不満を持っている」と述べ、このことが、本書に収録されている論稿を執筆する共通の動機となっている。そして、本書を「『挑発ある』と意図的に注記した」のは、「その研究成果」に「ことごとく弓を引いている」からであると説明する。さらに、「多くの人々の努力により部落問題が日々消滅して行く望ましい社会状態になった現在、この約一五〇年の部落問題文学を概観することは、文学研究のみならず、人権意識の向上と社

会の変革を目指す運動にも貢献する」と本書の意義を述べている。

また、本書に収録されている短い論稿は、部落問題研究所の月刊誌『人権と部落問題』の「文芸の散歩道」欄に載ったもので、長い論稿は、部落問題研究者全国集会「文芸」分科会での報告をまとめ、部落問題研究所の紀要『部落問題研究』に掲載されたもので、部落問題研究所の「毎回真摯な討議がすすむ文芸部会(年四、五回開催)の活動」も「研究者集会『文芸』分科会も、筆者にとつて、自分の探求が普遍的な妥当性をもっていることを確認出来る場所であったし、文芸作品の読解を進める格好の道場でもあった」と述べている。本稿では、本書の第 一章の「差別小説 『特殊部落』を検証する」を中心に紹介していくが、

同章に掲載されている他の論稿も必要に応じて紹介をおこなうことにする。

「特殊部落」は読まれなかった

著者は、「特殊部落」を論じた、平野栄久「『オール・ロマンス』事件」(『文学の中の被差別部落像戦後篇』、明石書店、一九八二年六月)、  
「『オール・ロマンス』差別事件」(『差別表現と糾弾』、部落解放同盟中央本部、一九八八年三月)、そして、平野一郎「オール・ロマンス事件 差別行政の糾弾闘争」(部落解放研究所、一九八八年九月、人権ブックレット12)について、「批判的に取り上げた三点の文章で共通することとは、『糾弾要項』を参考にして」いるのに、「糾弾要項」の語句を借りたことをその場では言わないばかりか、その場では「糾弾要項」の紹介すらしていない。これが他の場合なら、他人の文章、語句を盗用した、剽窃したと非難をあげることになる」と厳しく批判する。さらに、渡辺巳三郎氏の「終戦前後における部落問題短編小説」(註1)を引用して、平野一郎氏は、「『糾弾要項』の『オール・ロマンス』の差別はこうだ」の冒頭

の「筋書」と、全く同一文章である所から、『糾弾要項』の文章を引き写して、作品そのものは、平野は読んでいないのではないかと推測される。若し一読すれば、どんな文学の素人でも、エロなど一箇所も無いことに気付く筈である」と批判する。この三論稿だけでなく、「オール・ロマンス事件」について書かれた多くの文章は、小説そのものを読むことなく、「糾弾要項」の中に書かれている書き換えられた「特殊部落」が小説そのものと思いきみ、論述してきたのである。このことが最大の問題と言えるのではないか。

「糾弾要項」の問題点

著者は、11項目に亘って「糾弾要項」の問題点を挙げている。この中で、興味深いもの紹介する。まず著者は、「糾弾要項」の中にある「サツと読んだところ、ありふれたエログ口活劇物であり」の「エロ」について、前掲した渡辺氏の論文から「オール・ロマンス」の「特殊部落」は、どこを開いても、裸の女も出て来なければ、男と女が身体をいじり合ったり、性交したりする描写は、皆無なので

ある」を引用し、エロと言えぬ箇所がないことを説明する。また、「グロ」に関して渡辺氏の論文の「たしかにグロテスクと言え、言えない事はない。これは当時の部落の実際状況であってそれをそのままに書くのは問題があるが、グロテスク（中略）と言えるかどうか」を引用し、「臍物が捨てて置かれたら蠅がワンサとたかるのはあたり前の風景。『奇怪な堆積』とあるが、言葉の本来の意味でのグロと言うことは出来まい」と結論する。

「糾弾要項」が言う、「いわゆるカストリ小説である」については、社会学者である山本明氏の『カストリ雑誌研究 シンボルにみる風俗史』（出版ニュース社、一九七六年七月）から、カストリ雑誌のセックス・シンボルは「接吻、ストリップ、ブローズ、猟奇、有閑マダム、自慰、没落、パンパン、未亡人、貞操、姉弟の愛、エロ、阿部定、復員兵」だと説明している。このため、「特殊部落」は「エログロも他のセックス・シンボルもない。カストリ小説としては異色のものであり、『ありふれた』『カストリ小説』ではな

かったのだ」とする。さらに著者は、本書 章掲載の「執念の駄作家 杉山清詩」の中で、「皮肉なこと、『曝露小説 特殊部落』は杉山さんの作品全体の中では、エロもグロも殺人も出てこず、暴露した醜悪なものは何もない、きわめて真面目な小説だったのです」（註2）と説明する。

#### 「特殊部落」解く鍵

著者は、「特殊部落」の「作者のモチーフ（動機）と善意」を「解く鍵は、コントラスト（対比）の内容構成にあると推測」し、「人物と事件の二つのコントラストに注目をすべきである」としている。「人物としては、医師鹿谷浩一と純子（朴純桂）、河合芳太郎（金芳成）と泰子（朴泰麗）の二組の男女の純愛」に注目し、「事件としては、住民と警官隊との激突、乱闘と洪水の危険時の一致団結。混乱とその後の回復を描いた物語と言えるのではないかとし、この論証のため「全部」という言葉の使われ方を考察する。「特殊部落」の五章の「図越親分が急を聞いて鎮圧に乗り出した時は、既に遅かった。全部は部落

の生命線としてのドロク密造所を護るために、青年を糾合して蹴起した後だった」と、七章の「堤防が決潰すれば、全部は全滅する。そしてその危険が刻々に増大する。昨夜は敵味方となつて対峙した警官隊も、今日は部落を守つて活動し、避難民の誘導と収容とに大奮闘した」と八章の「崇高なる芳太郎の犠牲は、全部落の人たちに感銘を与へ、老若男女の区別なく、協力一致して努力した結果が、漸く水魔から部落を救ふことが出来た」を対比する。そして、「一方では無法とも言える警官隊との衝突、激突。そして結末では、部落を挙げての『博愛精神の凝縮』となつている。このコントラストの構成内容を作者は書きたかつたのではないかと推測する。

さらに、著者は「浩一と芳太郎の二人の青年の行動を追つてみると、これも誰もくみとろうとはしなかつた作者の善意がはつきりと浮かんで来る」とし、「浩一の行動は、最初から最後まで、『博愛』、『人種を超越した人道のため』の献身であり、『芳太郎の行動も、部落が可愛つて立ち上がった人』

と言えるし、『崇高な』『犠牲』である」としている。そして、「力強い形で描き出せなかつた作者の力量不足によって、浩一と芳太郎の行動は浮き彫りにされてはいない。その不満が強く残るが、二人の青年の献身と犠牲とを作者は描きたかつたのであり、『糾弾要項』にある『悪辣な』とか『悪意』とか言うものの正反対のものが小説の中には存在していた」と結論する。

また、「特殊部落」の「結末で、作者が突然顔を出して、『セミドツキユメンタリー』という言葉を使つていること」に着目し、「特殊部落」を執筆する動機として「作者を感動させる、複数の、ある事実があつたのではないか。それがあるからこそ作者はペンを取ることができたのではないか。それを描いたからこそ『セミドツキユメンタリー』の言葉を作者は使つたのではないかと推論する。朝鮮人差別について

著者は、「典型的な部落差別小説として題名だけは有名であった『特殊部落』は、近年になって、在日朝鮮人差別小説という、もう

一つの負の勲章を授けられる事態になったのである」と言う。その原因を「金静美が激しく弾刻してから」（註3）であり、「金静美の批判には強引な所があるため」、「科学的に検証することが急がれるのではないか」とする。金静美氏が「特殊部落」を差別小説とする論拠は、「『鮮人仲間』『内鮮』『特殊部落』の差別語をつかって書いた」とこと、「京都の被差別部落に住む朝鮮人の生活を、差別的に表現したから」であるが、「果してそれで差別小説と断定できるのか、『糾弾要項』と同じく疑義がある」とし、論証をおこなっている。「特殊部落」では、「鮮人」「内鮮」の語が一回しか使われていないばかりか、「あとは、朝鮮（三回）、朝鮮人（一回）、朝鮮服（一回）、朝鮮語（一回）である。なぜここだけ「鮮人」なのか。脱字の可能性も含めて公平に考察する必要がある」と金静美の論拠に疑問を投げかけている。

#### 作者の蹉跌

著者は、作者が社会的に葬られた原因を三点挙げている。一点目

は「掲載誌がカストリ雑誌であったこと」とし、「おとしめられることはあっても誰も公然と賞賛することはしない雑誌」であったためだとする。二点目として、「題名を『特殊部落』としたこと」とし、「差別的な意味合いを含めずに使っていても、差別撤廃を自覚した人々から許容される言葉ではない。運動がすすめばすすむほど社会的に克服されていく言葉である」ためだとする。さらに、三ポイントとして、「京都市の公務員であったこと」を挙げ、「公務員による差別言辞はいくらもあつただろうが、小説という、形になった、証拠として残るものとしては戦後はいじめてであつただろう」とする。

を示すものとして三例（第一章、第三章、第四章）使用しているだけである」としている。また、「賤民」の語の使用についても、第四章の一例だけで、「いやしい人間達」の意味で使用したのではなく、「『賤民』＝貧乏人が作者の使用法なのである」と解説する。そして、「『特殊部落』視、『賤民』視して、物語を展開したり、人物を描写していかないのに、不正確な言葉をつかまえられてしまった作者の名誉は二度と浮上するとはなかつたのである」と、作者の蹉跌を説明するのである。

#### おわりに 本書の問題点

本書の中の「差別小説『特殊部落』を検証する」の内容を紹介してきたが、この論稿の問題点を幾つか取り上げてみることにする。著者は、「『糾弾要項』の検証」で、「『糾弾要項』にある、『たとえば、『目やに、とうそう、果てはみつちやのはなたれ子たちが、ほとんど裸体に近い風俗で遊び戯れる空地があり』『昨日のゾウモツは始末もつかず、片隅の八エのちようりようにまかされ切つて、悪臭が鼻につく』と東七条に

対して作者は読者に嫌悪の情をおこさせ」に対して、「『東海道本線のガードに近い加茂川堤』に住している、戦後のある時期の、朝鮮人達（子ども、女、老人）の生活の、ある姿を、普通のリアルさでスケッチしただけではないのか」とする。さらに、「『昨日のゾウモツは』の所は、部落の道路に腐った臓物があちこちに捨て置かれる酸鼻な情景を描いているのではない。『扉を閉めた納屋の中』の様子である」としている。そして、「両方共、『嫌悪の情をおこさせ』ない読者も当然存在するような文章である」としている。「特殊部落」を読んで、東七条部落に対して「嫌悪の情をおこす」読者と「嫌悪の情をおこさない」読者がいるのは、当然のことである。当時、「特殊部落」の内容を知った京都府連とは無関係な東七条の人々は、「『全く事実無根のねつ造記事で、世人に対し東七条を犯罪者の巣クツと伝染病の温床のような錯覚と誤認と与え、東七条に対する恐怖と差別感を助長し、国民間の同和を破壊するもの』と断定」（註4）し、その許し難い差別に対して行動をおこすのである。

同じ文章でも、それを読む人の置かれていた状況によって差別と感ずるか否かは、当然変わってくる。このため、著者がこの論稿の冒頭で述べる「『オール・ロマンズ闘争』のきつかけとなった小説『特殊部落』（中略）は実は差別小説ではないのである」との断定は、このことを考慮することのない主張なのである。

さらに、著者は、「糾弾要項」の「『ドブロク密造所の経営によって部落の住民がうるおされ』、『全部落は部落の生命線としてのドブロク密造所を守るために立ち上がった』と、東七条の人たちが、まるで、ドブロク密造によって生活しているかのように悪意をもって書き、東七条はドブロクとヤミ米の町だとの印象を強く読者にあたえ」と「特殊部落」の原文である「部落にあるドブロク密造所は、朴根昌の経営するところ。特殊部落に盤踞する鮮人仲間でも、金力を持つことでは指折りの男だつたから、企業を営しながら部落の賤民をうるほし、人望を一身に集めていた。いはゞ、いま日の出の勢の朴根昌だつたが、それほどの男でもどうにも手に負へないこと

があつた」を対比し、「『指折りの男』、『人望を一身に集めていた』、『日の出の勢』の語句は肯定的な評価を強く含んでいる。『悪意をもって書』くのは全く反対である」と「糾弾要項」を批判する。しかし、「特殊部落」は、実際に「肯定的な評価を強く含んで」東七条の人たちのことを描いているのだろうか。朴根昌が経営をしているドブロク密造所やかつぎ屋の手助けは、非合法なものであり、摘発の対象となっていたものである。このため、どのように「肯定的な評価を強く含んでい」る言葉を使ったとしても、否定的な「闇」の仕事として描かれているのである。さらに、作者は朴根昌を「特殊部落に盤踞する鮮人仲間でも」と説明しているため、決して「肯定的な評価」しているとは考えられない。このため、「糾弾要項」が主張するように「東七条はドブロクとヤミ米（註5）の町だとの印象を強くあたえ」ていることは当然考えられるのである。

の嫉妬をもって、無法な暴力を行使した」など、東七条の青年を暴力あつかいするばかりか」と「特殊部落」の原文の「殺気立つて智性を喪失した彼等は、この動機を無批判に容れて、一人の浩一を遮二無二引き立て、行つた。落部の娘に手出しをしたといふ青年の嫉視が、無法な腕力を行使させたのだ」を対比しながら次のように批判する。「『腕力』は『暴力』にすりかえられている。この場面は浩一が連行されて行く所だが、冷静な彼は全く抵抗していないと考えるのが妥当だろう。青年たちは浩一の腕を取って連行したと思えるので、作者の使用した『無法な腕力』は大げさな言葉である」と作者の言葉まで修正しながら反論する。「殺気立つて智性を喪失し」、「浩一を遮二無二引き立て」るため、「青年たちは浩一の腕を取って連行」したとしても、逃亡や反撃を警戒しながらのもので、青年たちの「無法な腕力」はいつでも「無法な暴力」に変わるはずである。さらに、浩一は「芳太郎の処の納屋の中へ幽閉されて仕舞つた」のであるから、「特殊部落」の「腕力」と「糾弾

要項」の「暴力」は同意語であると判断できるのではないのか。さらに著者は、「糾弾要項」の「保健所の職員として市役所につとめ、業務として部落の家庭指導に当たっている人間によって何気なしに書かれた小説が、実に差別感にあふれており」について、「『何の気なしに書き』は、特に差別するつもりはなく、とか、差別の意図はなく、とかに解してはいけないのか」と反論している。作者が「特殊部落」を執筆するに際して、「特に差別するつもり」や「差別の意図」が無かつたのは当然のことである。「何気なしに書かれた小説」によつて、東七条の人たちは差別されたと感じ、深く傷ついたのである（註6）。自らの差別心を自覚している者は皆無であり、他者からの指摘により初めて自覚するのである。作者もその一人だったのであるのか。

また著者は、金静美氏の「糾弾要項」より「先に出された『（糾弾）要綱』にある、登場人物が朝鮮人である指摘が、次の『（糾弾）要項』では消されている事実」に注目して、京都府連が朝鮮人差別を意図的にかくしたとしている」と

の主張に対して、「差別だと追い込んで行く際に、小説の作者から『未解放部落のことではなく、朝鮮人のことを書いた』と逃げをうたれないために、部落問題にすべてを集中させるために、わざと『朝鮮(人)』を削除したのではないか、と推定をする」としている。著者は、「糾弾要項」に対して、「言葉をすりかえている」ことなどを細かく指摘しながら「糾弾要項」の問題点を検証してきたはずなのに、ここで何故、「糾弾要項」の弁護をするのか疑問である。「糾弾要項」が金静美氏の主張のように「朝鮮人差別を意図的にかくした」のかどうかは論証出来ないが、「糾弾要項」の最大の問題点は、「わざと『朝鮮(人)』を削除した」ことにある。著者の本稿執筆の動機は、作者が描いた「特殊部落」の内容が歪められ伝えられてきたことを問題視したことにあったのではないのか。著者が明らかかな矛盾に陥ってしまっていることが大変残念である。

註1 渡辺巳三郎「終戦前後における

部落問題短編小説 杉山清一

『曝露小説、特殊部落』(いわゆ

るオール・ロマンス事件)と、熱

田猛『朝霧の中から』、吉野壮児

『まないた棺』、『日本文学論

叢』(法政大学大学院日本文学専

攻委員会、一九九二年七月)

註2 「特殊部落」の五章では、酒場

「白鳥」で、「三つの屍体が転がっ

た」と殺人が描かれている。

註3 金静美『水平運動史研究 民族

差別批判』(現代企画室、一九九

四年一月)

註4 『夕刊京都』(夕刊京都新聞社、

一九五一年一月二日)

註5 「糾弾要項」には、「東七条は

ドブロクとヤミ米の町だとの印象

を強く読者にあたえ」とあるが、

著者は「『ヤミ米』についてはど

こにも出て来ない」と否定してい

る。確かに、「ヤミ米」とは記述

されていないが、当時の状況から

考えれば、かつぎ屋が車窓から河

原の草むらに放り出した荷物は

「ヤミ米」であったことは容易に

推測ができることである。

註6 拙稿「もつひとつの『オール・

ロマンス行政闘争』、『戦後部落

問題の具体像 大阪人権博物館調

査報告書第2集』(大阪人権博

物館、一九九七年三月)参照。

(かもがわ出版刊、二〇一一年一〇月、二  
八〇〇円)

## 史料紹介

# 伊東茂光の「北海道・樺太」視察記

白石 正明

## 解題

1

ここに紹介する資料は、京都市立崇仁尋常小学校長・伊東茂光の「北海道・樺太」視察記である。同資料は、伊東が一九二二(大正11)年八月六日から同九月下旬までにシベリアの尼港(ニコライエフスク)を視察してまとめたものである。

ここで伊東が崇仁小学校に着任するまでの略歴を簡単に記しておきたい。

彼は一八八六(明治19)年七月、鹿児島県日置郡日置村に生まれ、苦学して一九一(明治45)年七月、第七高等学校(造士館)を卒業、同九月には京都帝国大学法科大学法律学科に入学、一七(大正6)年七月、31歳のとき同大学を卒業した。のち九月、京都府立何鹿郡立女子実業学校教諭、翌一八年三月、京都帝国大学附属図書館事務嘱託などを務め、一九二〇(大正9)年一〇月三〇日付で京都市立崇仁尋常小学校訓導兼校長に就任した。

伊東が着任した当時の崇仁小学校は荒廃し、厳しい状況下にあった。彼は校区である下京区東七条の教育環境や生活環境等の改善に住民とともに諸々着手する傍、新たな教育実践への模索に取り組んでいた。

一九二一年五月下旬、崇仁小の二人の児童が京都駅員によって過度の暴行を受け、さらに差別の言葉を浴びせられる事件が起こった。その後、駅員らの「謝罪」で事件が解決したが、伊東は、遊び場を確保できない子ども達の環境改善に着目し、翌二二年六月、社会と家庭の連絡を図るため、崇仁小の第一回「学校開放デー」に取り組んだ。翌七月、彼は京都

市の「校長海外視察」の一員に選ばれ、夏期休暇となった八月「北海道・樺太・尼港」に教育視察に赴いた。今回紹介する本資料は、そのときのものである。

のち伊東は、崇仁小で自覚的な教師集団の形成を目指し、子ども性の育成するためとして知能検査による能力別学級編成（一九二六年）、学校祭の創設（一九二七年）、学校給食の開始（一九二八年）、印刷部の設置（一九三三年）などに尽力した。また彼は陸上競技を重視し、同時に静座室の創設（一九三三年）に努め、「崇仁教育」の名を世に高めていった。

だが、その教育の根幹には「天皇主義」があったが故に、一九四五年の第二次大戦の敗戦後、伊東は自ら崇仁小学校を去った。没年は一九六六（昭和41）年二月一〇日、享年八〇歳。

次に伊東茂光についての研究を述べたい。伊東については、すでにこれまで西元宗助、川向秀武、杉尾敏明、八箇亮仁、神楽子治らによる研究がある。

それらは、いずれも伊東と「崇仁教育」についての論考であり、今回紹介する資料との関係でいえば、神楽子治『校長ありき 伊東茂光と崇仁教育』（部落問題研究所、一九八七年）にのみ「シベリア旅行」として一節記されているだけである。しかも、そこに記されている記述は、今回紹介する資料とは内容が相容れない箇所が目立つ。そこで以下に紹介する資料が、今後の伊東茂光研究の一助となればと願う次第である。

## 2

参考までに、伊東が視察した「樺太（サハリン）」の状況について簡単に触れておきたい。

樺太はかつて日本の植民地となった歴史がある。一九〇五（明治38）年九月、日露戦争によるポーツマス条約から一九四五（昭和20）年八月、日本がポツダム宣言受諾降伏までの四〇年間、サハリン島の北緯50度より南は日本の植民地であった。

一九〇七年三月、明治政府は樺太庁官制を公布し、植民地の統治機関として樺太庁を豊原（ユジノサハリンスク）に設置した。四月から施行された。樺太庁の組織は、初め長官官房（秘書・文書・会計の業務）、第一

部（庶務・水産・警察・交通・臨時建築の業務）、第二部（拓殖・土木・林業・鉱業の業務）の三部制を施し、所要の地に支庁（長は支庁長）を置いた。その後の一九一三年（大正2）年二月には、内務部、拓殖部（大正3年11月廃止、大正7年6月復活、大正13年12月廃止）、警察部の三部制に改正され、指揮監督者である長官も内務大臣、内閣総理大臣、内務大臣、内閣総理大臣へと代わった。なお樺太庁の設置と官制改正については、詳しくは樺太庁編『樺太要覧』（大正15年刊）を参照されたい。

樺太の人口は、領有当初の一九〇六年末は一万二、三六一人だったのが、一九二一年末には一〇万三、六三〇人となり、約九倍となっている。前掲の『樺太要覧』によれば、一九二五年末の人口分布は、日本人一八万三、七四二人で、朝鮮人の移民は三、二〇六人で比較的少なく、それに少数先住民族としてアイヌ、ニブフ（ギリヤーク）、ヴィルタ（オロツコ）、その他アベンキ（キーリン）らの種族一、七二四人の居住からなっていた。

樺太の人口について語る場合、第二次大戦の敗戦後に日本政府に見捨てられた朝鮮人の問題がある。三木理史『国境の植民地・樺太』（塙書房二〇〇六年）によれば、樺太への朝鮮人移民の増加は第一次大戦後の好況が契機となり、一九二一年を境に渡航の経路が北サハリンから南下する人びとが多くなったと記している。

## 3

樺太は水産資源や石炭資源、それに森林資源が非常に豊富で、それに伴い製紙業・パルプ業などが代表的な産業として発展していった。樺太の都市は、製紙・パルプ工場の建設によって形成されたといえる。いささか長くなるが、当時の樺太の発展振りを記しておきたい。

社団法人全国樺太連盟刊行会編の『樺太終戦史』（一九七三年）には「工場は大泊、豊原工場などを除いて、多く炭鉱に近接し、森林地帯を流れる川の河口に建設された。原木と水と燃料が得やすく、生産物の積み出しにもよい錨地で、工場建設のツチ音とともに鉄道が伸び都市が生まれ発展した」とある。

三井の王子製紙株式会社の基礎を築いた工場が、それぞれ樺太の各地

に建設された。一九一三年初めに大泊（コルサコフ）に三井樺太紙料工場を建設、翌一四年七月に完成し、一二月に操業開始、次いで一五年五月泊居（トマリ）にはパルプ専業の樺太工業株式会社工場が操業開始し、好況に転じていった。そして第一次大戦の結果、日本国内のパルプ需要の増大に伴い富士製紙株式会社の落合（ドーリンスク）工場新設（一九一七年操業開始）を初めとして、一九一八年六月には真岡（ホルムスク）、二一年一二月野田（チェーホフ）にもそれぞれ順次パルプ工場などが設立操業されていった。

また厳しい自然環境による交通の途絶のため港湾設備と鉄道敷設にも三井の資本が大きな影響を与えた。一九一五年から大泊、真岡、本斗（ネヴェリスク）、内幌（ゴルノザヴォーツク）を重点に置いて不凍港の整備に着手した。さらに物資の輸送のため豊原 栄浜（スタロドウスコーエ）間の鉄道建設、結氷対策に不可欠な東西連絡線の豊真線（ユジノサハリンスク ホルムス間）の敷設にも着手していった。

樺太の玄関であった大泊は、一九一三年五月、北海道の稚内との間に鉄道省直営の「稚泊航路」の鉄道連絡船となって定期航路として運航されるに至ったが、今回紹介する資料では、樺太への旅は小樽からの船旅で始まり大泊の土地に足を踏み入れたとある。

その樺太は、産業勃興、高度成長の地であったといえる。そして発展の裏には過酷な労働環境が噂となっていたのであろう。

## 4

さて、本資料の内容について述べておきたい。

本資料は「夏の樺太より」（四回）、「初秋の北極」（四回）、「監獄部屋」の探検」（三回）の三つから構成されている。

京都からシベリアのアムール河口の尼港までの視察記である。その目的は「海外教育視察」であるが、記述内容は、伊東の新聞への寄書であり、また本人が「熊公の日記らしく」と記しているように、軽いタッチで綴っている。

その中で注目すべきは、「監獄部屋」の項であろう。監獄部屋の惨状は社会問題化していた（例えば、「監獄部屋から逃れて／生戻った男告発する」

『大阪毎日新聞』大正11・8・27）。監獄部屋に象徴される労働者酷使は、産業発展著しい樺太でも噂となり、伊東はその真偽を確かめにいった。文中には「何れにしても此太平の世の中に珍らしい且つ恐ろしい話である、其の真偽を確かめるのは私の此度の旅行の楽しき希望の一つであります」とある。

また拳銃まで用意していたことから考えて、伊東の旅行の目的が「海外教育視察」の枠内であったとは思われない。彼のシベリア旅行は北樺太のアレクサンドロフスク港に本部を置くサガレン派遣軍司令官・野田経宇陸軍大将に、サガレン占拠を直訴するという目的もあったという。

この直訴のことは、「わが師を想う／佐々木惣一先生」（『伊東茂光先生語録』）に記されているが、その詳細は今のところよく判らない。また伊東は、重大な「人道問題、社会問題」として現地視察を行っていると述べているが、その内容には触れられていない。さらに旅行記には、視察した「尼港の惨状の跡」の内容の記述もない。ただ後日（一九一三年九月三〇日）の「海外視察講演会」では、伊東は「尼港の惨状跡を見て」のタイトルで講演を行っているが（『大阪朝日新聞京都附録』大正11・9・30）。新聞紙上で発表を避けたのだろうか。

伊東茂光の視察記は、新鋭の校長が生まれて初めて「白靴」をはいて、北へ向かい人びととの出合いを楽しむ姿が見える。だが一方で視察のもうひとつの面、植民地支配への傾斜と植民地の産業がもたらす影響については慎重な筆致であることに留意する必要があるだろう。

（しらいし まさあき・元佐賀大学教授）

## （凡例）

- 一 翻刻に際して、漢字の旧字・俗字などは原則として常用漢字に改めた。
- 一 ただし、常用漢字にない文字は、原文のままとした。
- 一 かなの表記は、原文のままとした。助詞の「江」は残した。
- 一 踊り字は原文のままとした。
- 一 句読点・濁点・並列点は原文のままとした。なお、原文中の句読点が付されていない場合は、読みやすくするため、適宜に句読点を補った。
- 一 原文の誤字・脱字・誤植などは、訂正せずに、原文のままとした。



- 一 記事の日付は、年月日を付した。
- 一 記事見出しの改行部の箇所は「/」をいれ、全文を採った。
- 一 本文中の文字の大小・ゴチック・傍点などは、無視した。
- 一 判読不能の文字については、文字数分を で示した。
- 一 記事のはじまりは、一字下げた。
- 一 原文の中で、一部に現在では差別的および不適切な表現があるが、歴史的資料としてそのままとした。

#### 夏の樺太より(上) / 伊東生

京都市教育課から本年度の海外教育視察として市立崇仁小学校校長伊東茂光氏が雪深い樺太へ派遣された、同氏は去る六日午後九時五十二分京都駅出発した其旅行日記の一節を紹介す。

敢て と変つた事をしたり滑稽な真似をして喜んで居るのであります、自分で善いと思ふ事を其まゝ遂行して憚らないのであります、従つて色々の滑稽を演ずる事が多いのであります、今度の旅行でも私にとつては実に愉快な旅行だから第一洋服までも何度か小僧を叱り飛ばしてやつと理想に叶ふたものが出来てさて意気揚々、天晴れ自分こそは北国探検家で御座いと停車場に行つて見ると見送つて下さる誰彼の御厚意は千萬忝いが何が、さて口の悪い御歴々の事として此処に私を中心に一場の批評が始まつたのであります。

在郷軍人とも見まほしきカーキー色の洋服に大形一番のリュックサック毛布に洋傘一本足は和洋折衷に下駄といふ扮装すべてが苦心研究の結果になれる此の凛々しい服装もあばれ散々にけなされてしまひました。

或者は「釣鐘が歩いてくると思つた」といふかと思ふと他の者は「いやビール樽に足がついたやうだ」とも言ふ、「職工が国にかへる服だ」といふ人があるかと思ふと「洋服の尻をからげてはどうです」といふ人もあります、上着の少々長すぎたのは事実です、「熊に惚れられぬやうに」と注意する人があると横合から「いや、熊の方から逃げ出す」とひやかす悪戯者もありました、女の先生は一団となつて向ふの隅でクス／＼笑つて居ましたが近寄つて見るとさすがに女丈けに「大辺よう御似

合で御座います」「宮様」似て居らつしやいますなんていつては又も笑つて居る、ひやかすのかおだてるのか分らない。

青年団のY君が「下駄はあんまりだ」といふので態々靴をとりて団員を走らし汽車にのり込んでから届いて終に私も生れて初めて白靴をはく事になりました、厚意を涙ぐましく情しく思ひつゝ茲に此の旅行家は正十一年八月六日午後九時五十二分で京都駅を離れたのであります(八日函館発)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月十二日)

#### 夏の樺太より(二) / 伊東生

汽車は駆け出す、京都はすぐに消江で仕舞ひます、円い月が車窓を照して近江路を北へ／＼と驀進します、私は与へられたる機会を感謝せずには居られません、見馴れぬ旅路に諸種の調査研究する事は決して避暑どころの騒ぎではないにしても行く先々の汽車の中、道中、木賃ホテルには昔なつかしい熊公八公の同僚も居て面白い世間話もあらう、又独り静かに想ひを練つて自分自身をみつめる事も出来やう、平素静思の暇さへ無い私にはそれが何よりも／＼楽だ、感謝せずには居られないのは其点にあります。

東海道線は楽でしたが、翌日午後一時発の青森行と来ては御話にもならない程暑い上に客も満員で身動きも出来ぬ始末寒暖計は一〇一度を示して居ます、世間の一般定義によれば「済まし込んで居ねばならぬ」御嬢さんまでが泣き出しさうな顔して肌衣一枚になるほどで私も暑いには暑いが然し姑息な事はしまいと扇もつかはず汗をふきもしないで居ましたら体内からは汗、外からは煤煙で身体はドロドロになりました、禿瓦たる頭上からは蒸気が上つて居たさうです、御蔭で革の財布の中まで汗が沁みて札が濡れて居ました。

併し時間が立ち車が北進するにつれて次第に涼しくなり一夜明けて翌朝青森に下車した時は全く十月頃の寒さと變つて居ました、函館に上陸すると雨です、白靴には敬意を表して下駄で市街を一巡します、幸に蝦夷の地では異様の熊公を注視する人も無いやうです、大体私は都市を見

物するのに中心街のみを見て其地の文化を云々するのは間違ひだと思ひます、私は反対にいつも都市の片隅の端々から見物して其の都市を下るのであります、が函館の道の広い割に悪い事には驚きました、まだそれよりも質屋の多い事人事相談所の多い事には更に驚かされたのであります、港の町に人事相談所に質屋は何を物語るものでせう、併しそんな事を此処に論ずる必要はない熊公の日記だもの高大森町といふのは市の東方の片はづれ戸数四百二十戸もある大分県ならば問題にもなりさうな一小町であります、私がツカ／＼と其町に這入つて行くと此町ではさすがに人目をひきました（人目どころか犬までが吠えます）立小便しながら四十恰好のおかみさんが「あれは誰れだい」といふと二人三人すぐに家とは名ばかりの家から出て来て不思議さうに視て居ます、山から本物の熊でも出て来たと思つたのせう。

向ふの家の入口に腰打ちかけて打見てる四十位の男がある、私が四尺位に近よるとニヤ／＼笑ひながら「瘦る薬でも飲んだらどうだい」と真正面から一刀あびせて来たが、そこは馴れた私「飲んだけれど中中だ、時に町長さんの宅は何処だね」ときくと此男親切に教へてくれて自分で立つてつれて行かうとしたが足が悪くて立てない、迷宮みたいな様な町を彼地此地歩く中に子供がたかって来た、私を見て或子供は陸軍大将だといふ他の子供は薬売りの廃兵だといふナール程廃兵とはうまく考へた、洋服がカーキー色だから、町長さんに町の事情をきいて出て来ると子供はまだ蝟集して此町は海岸の砂地だから不潔な事は少しもない、其の砂原で暫く子供と遊んで居ると罪のない子等はすぐに馴れる、帰りに橋の袂まで送つて来て「左様なら」と別れた時は涙ぐましかつた、何処の果でも子供は天使だと思ひます。

日の暮れかける頃駅前について飯屋に入ると其日の労働に疲れた赤銅色の連中が盛にやつて居る話をきいて居ると中々面白いが書くとも果てしはありません、飯代の安いには驚きましたが、器物なんかの汚い事も一層です、飯後の茶はもうないからとて水を出されたのには閉口しましたが態々煮かしてもらふのも気の毒で水で辛抱しました、今私は函館を去らんとして停車場の広場に立つて居ます、月が高く照つて風がうすら

寒い、アイスクリームを売る声がまるで蟲の声の如にさみしく感ぜられました（十日小樽発）

（『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月二十一日）

夏の樺太より（三）／伊東生

小樽行の汽車にのつたのはもう夜でありました、車中はさすがに寒い寒暖計は六十七度を示して居ます、客は皆な魔法瓶から熱い酒を出してのんで居る、私はチク／＼腹が痛み出した、はては下痢をやる、さては先刻の食物に一品変なものがあつたが、あれが障つたかと思つても今更追つつかない、盛に便所通ひをする、あゝこんな時あつい奴を一杯グツとひつかけたら腹位何でもなからうにとこの時丈けは酒がほしくなつた、然しまてよ、いかに旅先で人が見て居ないたつて誓を破つてのむなんて卑怯だ、よし死んでものむまいと瘦元氣を出して遂に抵抗しぬきました。

夜中苦しんで／＼苦しみぬいた揚句夜は次第にあける、外を見るとさすがに北の国です、早や秋の草花が咲き乱れて居ます、向ふの方には点々として切り開かれた畑地が見江ると其向ふには本物の熊の住みさうな深山が招くやうです、小樽について先づ樺太行の便船をきくと明日千歳丸が出帆するとの事でそれでは今日は小樽に滞在して待つ事にしやうと決心しました。

さてリュックサックを降ろして一夜安静の地と定めたのはさゝやかな木賃宿であります、通された室には四十格好の橋川さんと云ふ人が寝そべつて居ました、はじめは怪訝そうにジロ／＼見て居ましたが、この社会の人の常としてすぐ打とけてしまふ、「おまいは何地のもんだ、何処へ行くんだ」「京都から来てこれから樺太からサガレン州へ渡るつもりだ」「何の商売か工夫でもするつもりか」「いや僕は学校の教員で色々の事を視察に行く」と云ふ問答の後橋川さんは私を了解したらしい、そして「おまい」を變じて「先生」にする態度も變つて来た、樺太行の乗船券を買つて来やうかと云ふのでたのむと大分遠い道をすぐ駆け出して行く。

私は四日ぶりに畳の上になぞべつて其の上入浴にも行きました、そして橋川さんの話をきく、何でも橋川さんは讃岐の生れだが二十年前に渡来してからあらゆる事に当つて見た、放浪の生活は今でもかうして木賃宿生活を余儀なくしてつまらぬ仕事に其の日を送つて居る、樺太の事でも総て荒っぽい事を知らぬ事はないらしい、熊に追はれた事もあると話す(千歳丸船中にて)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月二十二日)

夏の樺太より(四) / 伊東生

酒は好きかときくと命よりも好きだと云ふ、それでは一つ、奢らうかと云ふと目を小さくする、金を渡すと三拜九拝して酒屋に走る、「大将飲まぬか」と杯をさす、始めの「おまい」は「先生」になり今度は「大将」になつた、僕は飲める事は飲めるが今は誓ひを立て、やめて居るからのまぬと答ふると「誓ひも何もあるものかこんな甘味いものを」と遠慮なく人を誘惑しかける、幸ひにも私は其誘惑に打勝つたのでした。

酒の廻るにつれて橋川さんは尚身の上話や面白い事を話す全くよくしやべる然しだん／＼舌の運転系統が円滑を欠く如になつた、そしてまゝいには歌ひ出し踊り出すではありませんかほんとに酒のみは可愛らしいやがて私は眠つてしまつた、橋川さんは其後どんなにしたかは知らぬが余程夜も更けてから宿の若者が起しに来て、「大変だ／＼早く来てくれ」といふ、起上つて下りて見ると警官が立つて橋川さんが頻りにあやまつて居る、橋川さんは私を見ると又「先生」に逆戻りしていふ「先生誠にどうも面目ない事ですがついその喧嘩をしました為に今警官に拘引される所ですが何とか一つ先生から頼んで下さいませんか」

事情を聞けば橋川さんが酔心地で道に出ると一落戸漢と衝突した其男も強か者で力量もあるが、然し橋川さんが敏捷であつた為に機先を制し敵の振り上げた下駄をとるなり散々に打擲した為に重傷を負はした、喧嘩の動機は先方にあつたが、橋川さんは殴るなり宿に駆込んだ所を押へられたのである、然し下駄を振り上たのは先方だ橋川さんはむしろ正当に防衛したとも云へる、警官もよく物の理の判る人で私の言を容れられ

相手の男にも逢つて事は示談で済みました、後で医師の診察によると治療三週間だとの事で潰れた筈の右眼は無事でありました。

橋川さんと何の因縁かうす寒い小樽の町を交番所に行つたり被害者の家に行つたり宿に帰つて寝たのは二時半でした、翌日樺太へ向つて出帆する時海岸までついて来た橋川さんは今度は「大将」から「旦那」に変わつて「旦那ほんとに有難う御座いました又何処かで御逢ひする日もありません十分御身体を御大事に」と泣き出しさうな声で別れを惜んでくれました(千歳丸船中にて)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月二十三日)

初秋の北極(一) / 金色の目の狐とノ物凄しい熊公 / 伊東生

汽船千歳丸は北へ／＼と直進します、来し方北海道の陸も見江ずなつて夕方の空には明星が、輝いて居ます、鶏の声に目をさまし、早やついたかと甲板に上ればカラフト大陸は悠然と横はつて居ますが、然しまだ／＼何海里も隔つて居るのには不思議とよく調べて見ると、さても／＼おかるぢやないか、籠に入れられ船に積まれてカラフト三界へ売られ行く鶏が大海の真只中で暁を知らずのでありました。

削られた架崖の下の大泊の町に上つた時は身体中がゾク／＼する位に嬉しかつた、此の日は大泊で本夏第二日目の暑い日といふのに日はてりつても暑いとは思はれませんが、官衙学校会社などを訪ね書籍店をひやかして町民の趣味傾向を窺ふに凡てが内地と変つて目新しく愉快でありました、中にも養狐会社の狐先生巡回し行く私を見て檻の中で前半身を心持屈めあの金色の目をむいて立打の構へをなしたのは憎くも又可笑しかつたのであります。

小樽の宿屋で同宿した老夫婦、秋田の人で六十何歳といつて居た、家財道具を大包にして背負ひこれからカラフトの娘の許に行くときかされた時は私は何となく気の毒に思つた、気の毒に思つた位にはカラフトを、深山幽谷の地続きで熊がノソ／＼横行しそして村落には木の皮で織つた衣服つけしアイヌがウロ／＼して居る位にししか思つて居なかつた、来て見ると深山はあつても熊先生仲々出ては来ぬ上に土人は漸次一地方

に集められて町に歩くのを見る事も出来ない有様。

人にきくと冬は寒いには寒いが凌げぬ如な事はない却て内地の冬よりも凌ぎ易いといふ(樺太大泊りにて)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月二十九日)

初秋の北極(二)ノ亡び行くノアイヌの群ノ伊東生

豊原の町は京都の町に似て整然として居ます、然しさすがにアラツクリ大工が家を八分通り造り上たといふ形です、初秋と云つてもまだ八月といふのに強い風が窓ガラスをビュー／＼ならして居る、夜になると広い大通は行く人も少く鈴をつけた馬車が時々走るのであります、二十五台の此の馬車は豊原唯一の交通機関です。

樺太神社の高地から眺むると眼下に豊原の町がひらけ其左向ふは果しもなく大平原がまるで海の如く広がつて居ます、右手の向ふには鈴谷山脈が、煙つて居ます、恰度愛宕山一帯のそのの如くに見江てあの麓には如何にも人の棲みさうに思はれますが、彼のあたりこそ恐ろしき熊のみかと思へば変な気もします。

博物館の半日は愉快でした、農産物、鉱産物、林産物、と見て行つて次に動物の剥製や土人の細工物、衣服類など見て居ると昔のままのアイヌ人の生活も想像され低徊去るにしのびぬ感に打たれたのであります、年々に減じ行くアイヌはやがてから物品によりてのみ想像し得らるゝ時代も来ませう。

慈恵院は更に悲惨を感じました、カラフトに流れ来て病にとりつかれ、とりつく島もなき病者を日々卅人平均に収容してあるのであります、かくして此病院のつめたいベットの上で死ぬ人も数多いとの事であります、中にもペテロスキーといふ九十二歳の露人は酒好き煙草好きでやゝもすれば逃げ出して乞食しては又かへつて来て困らすとの事でした(豊原町にて)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年八月三十一日)

初秋の北極(三)ノ交通機関はノ荷車三台ノ伊東生

栄浜はさみしいそして風の強い町でありました、町といふよりも海浜の小漁村で而も何となくなつかしい地であります、汽車を降りて海岸に行くといふも隅田川丸が遥の沖に盛に煙をあげて居ます、そして東海岸を航行し海豹島にも行くのだとの事で私も是非行きたいには行きたいが、其間に十日の日数を要すとすれば尼港に行けなくなるので遂に断念しました。

材木が豊富で宿屋の家も美しく実に静かな一夜を送りました、ハガキを出す為に宿を出でんとすれば主人は提灯をさげて行けといふ物珍らしさにかりて行く、途に若者共が数名約束の如くに皆が皆白手拭を頭に冠りて行き来するのは町の料理屋を素見して行くのださうです。

娯楽の機関は何もなく町の中には乗物として二三の荷車があるのみであります、独りねそべつて居ると波の音が枕に通ひます、ランプの油煙の匂ひは十幾年前の中学に通つて居た頃を思ひ出します、実にさみしいなつかしい町でありました、自分は支庁出張所及其他について現況を調べ尚将来の事も考へぬでもないが、熊公の日記らしくもないから。此処には省きます(栄浜にて)

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年九月一日)

初秋の北極(四)ノ恐ろしいノ監獄部屋ノ伊東生

汽車の中でも汽船の中でも又宿屋でも道中でも色々な人から色々な話をききました私は特に監獄部屋の事を尋ねたのであります人が人によりて色々変つた話もありました、或人はありと云ふ或人は無いと云ふ又或人はあるにはあつても評判の如くではないといふかと思へば「ナニニ評判以上」だといふ人もある、而も皆自身で見えて来たと言はれては私は何れを信じていゝか分らない、げに世の中の評判ほど当にならぬものはない、私は少くとも自身が十分体験した上でなければよしともあしとも批評の出来るものでないと思ひました。

何れにしても此太平の世の中に珍らしい且つ恐ろしい話である、其の真偽を確めるのは私の此度の旅行の楽しき希望の一つであります、豊原の宿屋の番頭は其間の消息にはよく通じて居りました、「宿料が大分借

になつて払ふ見込みから前貸してくれ」と口入屋に申込み喜んで応じてくれる、そして、「二三日山で働いた上何とか理由をつけ前借金の外に二三十円も払つたならば出られぬ事もありますまい」と番頭は語りました、番頭に事情を話して一緒に其紹介所に飛び込むとなるほど主人公大喜びですぐに相談はまとまる、「何れ二三の用をすましてから正式に着ませう」といつて出ました。

樺太庁に行つて長官と保安課長に監獄部屋の事を承つたのは其の後の事でありました、何れもこれを否定して夢さらないといはれる、こゝに於て私も迷はざるを得ないが何でもないので態々金を使つてまで行く必要もあるまいと化けて行く事は断念しました、乍然見るには是非見たい。

豊原と真岡町十九里余の間は今鉄道工事が盛に行はれて其間に所謂監獄部屋はあるといふ、目下の交通は自動車と馬車である、自動車は客が定員に達せねば出さぬが馬車は郵便物を送るため夜十二時に二人乗一台が出るといふ、私は馬車により道々カラフト山間の趣味を味ひつゝ又工事の状態も見たいと思つてそれに決したのであります、豊原の町はすぐ出てしまふ風は寒くて毛布を着ても尚寒い合客は一青年であります、其青年は前夜徒歩で真岡に向はんと一里ばかりもやつてくると叢の中から飛び出したものがある、吃驚して見ると三十歳位の一壮年監獄部屋からの逃走者で顔や手足に生傷がついて居た、此処まで逃げて来たがあまり恐ろしいので蚊にさゝれながら、隠れて居た、どうぞ助けてくれと泣きつかれ又も引返して豊原の宿屋にかへり一夜静かに寝かしても恐ろしさの為まだ何も云へなかつたと色々模様を話すのであります、私は実に不思議でならぬ馬丁もまた「よく逃走者にあふ事」を話しました。

豊真山道は実に険しい、其の険しい道路のまだ上の本当の人なき里に部屋はあるのであります、とにかく一応真岡につく事として夕方ガタ馬車にこつき廻された背の痛さをしのびつゝ宿につきましたところが又合客に久保田鶴吉といふ売薬行商者が居ます、此の人が二三年前アレキサンドルに通ずる軍用道路開鑿当時の悲惨な物語をします、日に三人から五六人づゝ死体を見ぬ事はなかつたとの事で今はそれまではなからうが監獄部屋は敵としてあるに相違ないと主張するのであります。

土地の警察に行つてきくと又跡方もない嘘だといふ、これでは全く何がか薩張り判らぬが私は愈意を決して聞かさへも恐ろしい監獄部屋！狼の様な凶悪の徒の虜となり、鉾山の坑に或は深山の電工事に引摺り行かれて奴隷に等しい圧迫を受けつゝ生きながら地獄の苦に泣きつゝある、幾百の我が同胞の実情を探查すべく去る十八日監獄部屋に向けて出発しました（樺太真岡港にて）

（『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年九月二日）

監獄部屋の探検（上）ノ実弾のピストルを携へてノ鬼が出るか蛇が出るかノ伊東生

京都市教育課から派遣されて北極へ学事視察に行つた伊東崇仁小学校長は樺太の監獄部屋や尼港の惨劇の跡を視察して一両日前帰校したが、氏は本社に対して監獄部屋の探検日記を寄せた。

樺太の手井駅で汽車を降りると雨は益激しい横降りで自分の大事な洋傘は骨が折れてしまつた、仕方はない番傘を二円十銭で買つてさて愈山路にかゝる、雨はふる、風はふく、腰からはズブ濡れの態、そんな時にはすぐ自分の心の中の弱い奴が頭をもたげる、「ナンダこんな悪い日に苦しい目を見んでもやめて引返したらいゝぢやないか」と。今度は強い奴が目を見らして、「ナニ弱い事をいふな自分は男ぢやないか、これつばかしの雨や風に恐れて何とする進め／＼死ぬまで進め」、此に於て自分は此両面の心を批判してみる。そして後者を正なりと信じて軍配を上げて敢然として進んで行く道に東洋一といふものを見た、それは一の大きな谷を堰きと止めて貯水池としてある製紙会社の用水とある、人間の力も偉大なものだと思ふ。

行く手の山々は未だ嘗て斧を知らぬ深林である、路の両側は六尺豊かの藜が繁つてその葉から落ちる雨滴が自分に注いで行けども／＼路はつきない、もう余程来たと思ふ頃幽かに鶏の声をきいた、間もなく一の谷間に新しい家の四五軒並んだ所に出る、此処が土工請負の事務所、樺太鉄道局出張所、巡查派出所、豆腐屋などのある所であつた、此処を中心として所謂監獄部屋は点々としてあるほんとに人里はなれた静かな場所

である、山奥の雨は寒かつた土工も、役員も、監督も今日は思ひに休んでゐる、突然一個の見馴れぬ不恰好なカーキ色が舞い込んだのは少からず皆の人々を驚かしたらしい。

生地獄だの監獄部屋だのと喧しく評判される所だ、どんな青鬼赤鬼が居るかと恐る／＼のぞいて見ても一向それらしい者もない、親鸞様ではないが却て皆が善人らしい顔の人ばかりである、渡る世間に鬼はなしといふから或はそれかも分らぬ、此分ならば滅多に打殺されもしまいと一夜の宿を乞へば二つ返事で許して呉れる、足も洗へ着物も替へよ、風呂にもはいれ、御飯もたべよと至つて親切なもの、地獄の沙汰も金次第なんていふが金がなくてもこんな有難いものならば本願寺様にお賽錢を進ずる必要もない、哩と横着な心も起つてくる、其夜を此地獄の亡者達と一緒に寝た、そして亡者達の話もきゝ又鬼共の話もきいた、不思議にも此処の鬼は付き物の金棒は持つて居ない、況んや飛び道具なんてものもつ鬼は一匹も居ないらしい、それに私は人間の浅間しさ若し鬼が攻めたら応戦する考へで実弾入りのピストルをポケットにひそまして居たのは我ながら恥しいくらいだつた、さて私は部屋の見たまゝを記して見たい、部屋は二種に分たれる、一は信用部屋他はタコ部屋（若しくは募集部屋）と云ふ、信用部屋は親方と同郷の者又は樺太在住者にして信用して来り働くもので前借の制度はない、従つて取立てゝいふ事もない。が然しタコ部屋に入るものは内地北海道より周旋人の手を経て応募し来るもので皆五十円乃至七八十円の前借の下に働くものがある、其応募者をタコと称してゐる、此のタコ部屋が所謂監獄部屋の事である、タコに二種類あり、一は悪周旋人の口車にのせられて土工に経験もない人々が金のなる木でもある位に考へて応募するのの一つは部屋を荒して歩く渡り者で「前借踏倒し逃走業者」である、これを「飛びつちよ」といつてゐる。

（『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年九月二十五日）

監獄部屋の探検（中）／十二時間労働と賃銀／夫婦連れの土工もある／伊東生

悪周旋人に責任観念は棄にしたくも無い、彼等は仕事に経験の有無など考へて居られないで人の頭数さへ揃へばそれでいゝ、そして何十人のタコをつれて雇主に引渡してしまへばタコの前借金の大部は自分の懐にはいる、だから自分の世話したタコが逃げて来ても寧ろ喜んで迎へる、そして今度は他の部屋に売るのである、一方雇主の側では折角高い金を出して買ふたタコだ少しでも余計に働かしたい、それに北の国は働く期間が至つて短いから気がでない、するとタコ連中はこんな約束ではなかつたと不平をいふ、其中に「飛びつちよ」はズン／＼逃げる、これではいかぬといふので監督を厳にし逃亡を防ぐやうに部屋の構造をかへる、こんな事から今日の所謂監獄部屋が出来たらしい、即ち便所も洗面所も浴場も炊事場も全部が同一屋内にあつて其処ですべての用が弁じられる、入口は戸締を厳にして其上一、二人の見張番は徹宵警戒してゐるのである、掲出せられた勤務時間は左の通りである。

就業五時 朝食九時 休憩九 一〇時 昼食二時 休憩二 二・三  
〇時 終業六・三〇時

これによると十二時間労働になつて居る、此時間が厳守されてゐるか否かは最も重大なる問題だと思ふがこれ又は自分が暫く働いて見なくちや正確な事は分らない、賃銀は二元五十銭位から最高四円位もある、食物は私にとつて左程粗食とは思はれない、昔外国で賃銀よりも食費を高くして一生工夫の足の洗へぬ制度を取つた事を聞いたが此処ではそんな事はないらしい、富裕な親方になると必要品等を仕入れて置いて原価で工夫に売捌いて居るものもある、唯雨の降る日は賃金が貰へないから食費が借になる、連雨になると骨休みどころぢやない、大恐慌を来すのである、それでも辛抱強い男は貯金して故郷に送金する人も決して少くないのである。

部屋に於ては階級が厳しく存して居る、上飯台、中飯台、下飯台のそれである、仕事の能率や信用の如何によつて以上の三階級に分れてゐるが、部屋の中もそれに応じて上飯台は土間を隔てゝ一段高くし更に中飯台は一方に稍低く下飯台は他の一方に尤も低く起臥する仕組で、上飯台の者は高所に於て起き伏し食し而して他の者を監視する、中飯台は自己

の席にて飲食するが下飯台に至つては土間に作りつけられたる台に於ていつも立食の饗である、部屋を飯場といひ飯場には飯場長夫婦が居る、そして工夫には夫婦者もあり子供連れもある夫婦者の為には別に小室を設けてある、尤も面白いのは便所で広さ三畳敷位の深さ六尺もある大きな穴がある、そして丸太を二本組合せた上に板をつけたものを穴の上に四五本並列してあつて其の板と板とが踏台になる、一遍に何人でも這入れる仕組で別に隔ての覆もあるでない、下を見ると目が舞ひさつたが然し悠悠バツトを吸ひ隣の奴と話しながら用を達する便利もある、如何にも原始的の気がするが然し之を汽船のあのせま苦しいのに比べると天空快濶どれほど気がいゝか分らない、何れの小屋でも必ず聖徳太子を祠つてある、又飯場の長の趣味に従つて造花を並べた所もあつた、「袖すり合ふも他生の縁」と筆太に書かれた額をも見た。

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年九月二十六日)

監獄部屋の探検(下) / 鬼の様な悪周旋屋 / 前借を踏倒す労働者 / 伊東生

仕事は困難らしい、然し乍ら彼等の血と汗のしづくが聽て文化の基となつて我等は其恩恵に浴するのであると思へば感謝せずには居られない、現場には必ず監督がついて、仕事の指揮をし、又働きぶりの監視もして居る、時にはなぐられる事もあるらしい、併し乍らどうにかして怠けやうとしてゐる工夫が其の打擲の因を提出して居るのではないかと思はるゝ節もある。

タコの中には十分性質のよくない者もある、此間も三人組で斧をふり上げ監督を脅迫し悠悠逃亡したのもあるといふ、かくして彼等は前借をふみ倒し、七遍も八遍も逃亡する者もあるさうだ、又極く最近に工夫は巡査に殺人罪を殊勝らしく自首した、警察に護送して取り調べると真赤な嘘で逃亡の準備行為に過ぎずかくて一週間の拘留処分の後彼は悠悠と逃亡したとの事だ。

山には請願巡査も派出してあつて毎日巡視してるとの事であるが請願巡査派遣の効果は私は知らぬ、私は今軽率に此の問題を断ずる事は出来

ない、併し乍ら事の起因は前借にあるのではないか、前借がある為浮浪の徒が集る、勿論そんな連中は初めから働く気なはく安楽して金を儲けたいのと逃亡とが目的だから従つて雇主も之に対抗する。工夫が上手な手段をとればとる丈け雇主も上手になる、かくして漸次面倒な問題を惹起するに至るのではないか、併し乍ら前金なしでは人が得られぬ、人の得られぬのは国民が植民地に了解のない為に善良な工夫が行かぬ為だと思ふ、即ち内地で喰ひつづぶしの浮浪者が前金目あてに行く事になるのであり自分風情に柄にもない言分だが私は今是非の判断をしたくない、只前借が労働者を墮落せしめる事は疑ふ余地もないと思ふ、而も其の前借の大部分は悪周旋人の懐に入るのを思ふと悪周旋人が監獄部屋の製造本店とも云へると思ふ。

太古の如き静さの中に一夜を明した私は色々面白い話もきゝましたがそれは後日にゆづりませう、只一つ六十四歳になつて中々ママに働く爺がありました、六十の坂を越江で何でこんな所で働くかときいて見たら今から二年前豊原の遊廓に浸り込んで二進も三進も行かなくなつて仕方なく流れ来たが今は却つて呑気でよいといふ、国には大きな子供も残して来たが今はもう何とも思はぬと答へて居ました、翌日の日は一点の雲もなき好天気半日仕事の現場を駆け廻つて昼過から下山の途につきました、丸木橋の上で皆私の姿が山に入るまで見送つてくれました、昨日に引きかへ気持のいい天気に驚や其他名も知らぬ小鳥が囀つてゐました、焼跡の山には今を盛りと色とりどりに美しい花が咲いてゐる所もありました。

今や監獄部屋の問題は重大な人道問題、社会問題として論ぜられておます、ほんとにありとすればそれこそ由々しき問題であります、幸か不幸か私は評判通りの部屋を実見する事が出来ず此山を降りて次に官行伐採事業をも見ましたが此処でも目撃する事は出来ませんでした、世評が喧しいからとて自分の見た事をも誇大に吹聴するやうな事は私に出来る芸当でありません、又小さく吹聴する事も出来ません、私は只私の見たまゝを書いた文であります〃完〃

(『大阪朝日新聞京都附録』大正十一年九月二十七日)

- 部落解放 656号(解放出版社刊, 2012.1): 1,050円  
 部落解放・人権入門 2012 第42回部落解放・人権夏期講座報告書
- 部落解放 657号(解放出版社刊, 2012.2): 630円  
 特集 解放運動の現場から 四国編  
 本の紹介 『靴づくりの文化史 日本の靴と職人』(稲川實, 山本芳美著) 前川修  
 かくれスポットおおさか案内 1 道頓堀 吉村智博  
 まちかどの芸能史 13 琵琶法師・座頭 村上紀夫
- 部落解放 658号(解放出版社刊, 2012.2): 1,050円  
 部落解放研究第45回全国集会報告書
- 部落解放 659号(解放出版社刊, 2012.3): 630円  
 特集 全国水平社創立90年  
 全国水平社創立90年の闘いに学ぶ 組坂繁之/個の尊厳と相互扶助を求めつづける精神 水平社創立90年に立って 宮崎学/松本治一郎、水平社、人権 イアン・ニアリー/無二の親友 井筒和幸/部落差別解消は道なかば 旭堂南陵/私たちが考えている部落解放とは 徐知延・徐知伶  
 本の紹介  
 今井照容著『三角寛「サンカ小説」の誕生』井内秀明/池原毅和著『精神障害法』八尋光秀  
 福島差別 もうひとつの原発事故問題 奥田均  
 かくれスポットおおさか案内 2 千日前 吉村智博  
 学校における性暴力 支援者としてのありかたを問う 1 「養護教諭」として性暴力にであう すぎむらなおみ  
 まちかどの芸能史 14 説経 村上紀夫
- 部落解放研究 194(部落解放・人権研究所刊, 2012.3): 1,400円  
 特集 近現代部落史研究の論点と課題  
 報告 「国民融合論」の成立と近現代部落史研究 手島一雄/座談会 近現代部落史研究の論点と課題 1 手島報告 「「国民融合論」の成立と近現代部落史研究」をめぐって 井岡康時・手島一雄・友常勉・廣岡浄進/報告 部落史研究における身分・階級・物語・コモンズ 友常勉/座談会 近現代部落史研究の論点と課題2 友常報告 「部落史研究における身分・階級・物語・コモンズ」をめぐって 井岡康時・手島一雄・友常勉・廣岡浄進  
 信州松本藩領大町組の被差別民 「永代留書帳」を中心に 斎藤洋一  
 三重県松阪の都市部落が経験した近代 宮本正人  
 補遺～「部落民」という位置が意味するもの 宮本正人  
 部落解放研究 18(広島部落解放研究所刊, 2011.12): 1,000円  
 研究所創立40周年記念号  
 理論と運動の批判と展開  
 豊かな育ちを保障する保育をめざして 山下真澄/広島の同和教育 その歴史とめざすもの 香渡清則/解放理論を深めるための宗教的試論 政平智春/部落解放運動の混迷 1990年代初頭から 岡田英治/パラダイムの転換と瓦解 特措法後の部落問題研究 青木秀男/理論は真実追求と変革のために 小森龍邦  
 広島部落解放研究所 創立40年の記録 瀬上和俊  
 『部落解放研究』目録
- 部落解放ひろしま 90(部落解放同盟広島県連合会刊, 2012.1): 1,000円  
 特集 広島県の部落実態 喫緊の課題を探る  
 解放運動の人間像 31 志を伸べんととせせば... 小森龍邦  
 マイノリティ研究 6号(関西大学マイノリティ研究センター刊, 2012.1)  
 韓国における性同一性障害と性別変更の法的可能性 一般法院の司法解釈による性的マイノリティの人権救済のあり方 岡克彦  
 イギリスの裁判所におけるイスラーム法 法の多元性をめぐる無知と無視について ヴェルナー・メンスキ著/石田慎一郎訳  
 少数民族の基本的文化権を明らかにしよう 田艶著/鈴木敬夫訳  
 マイノリティの「平等な権利」とは何か 常設国際司法裁判所勧告的意見によって示された解釈 西平等  
 ライツ 151(鳥取市人権情報センター刊, 2011.12)  
 今月のいちおし!! 『困ってるひと』(大野更紗著) 福壽みどり  
 リベラシオン 144(福岡県人権研究所刊, 2011.12): 1,000円  
 特集 災害と人権  
 精一杯生きてきた 宮本秀雄さんに訊く 5 川向秀武  
 水平への詩想 水平社九州同人の短詩型文芸(上) 金山登郎  
 資料紹介 生活の柄 62 「近世民衆史の泉」改め 竹森健二郎
- 和歌山研究所通信 39(和歌山人権研究所刊, 2011.11)  
 和歌山県とハンセン病問題 2 無らい県運動 矢野治世美  
 和歌山研究所通信 40(和歌山人権研究所刊, 2012.1)  
 勝手な独り言・和歌山の部落史編纂に期待を込め 池田清郎  
 和歌山の部落史編纂会だより 5号(和歌山の部落史編纂会刊, 2011.7)  
 室町初期の金剛峯寺領庄園における大検注の実施と諸階層 『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』刊行に寄せて 山陰加春夫  
 近世本願寺の「穢寺」について 高野豊



- 地域と人権 1108号(全国地域人権運動総連合刊, 2012.1): 150円  
「竹田の子守唄」をめぐって 13 今なぜ「竹田の子守唄」なのか 川部昇
- 地域と人権 1110号(全国地域人権運動総連合刊, 2012.3.15): 150円  
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 18 丹波正史  
ちくま 490(筑摩書房刊, 2012.1): 100円  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 56 第13章 転向の時代 2 沖浦和光  
ちくま 491(筑摩書房刊, 2012.2): 100円  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 57 第13章 転向の時代 3 沖浦和光  
ちくま 492(筑摩書房刊, 2012.3): 100円  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 最終回 第13章 転向の時代 4 沖浦和光  
であい 598(全国人権教育研究協議会刊, 2012.1): 150円  
人権文化を拓く 174 ハンセン病問題の解決をめざして回復者の方々と共に歩む 松下徳二  
であい 599(全国人権教育研究協議会刊, 2012.2): 150円  
人権のまちをゆく 60 北山十八間戸と東之阪  
同和教育論究 32(同和教育振興会刊, 2011.12): 1,500円  
特集 大遠忌法要と同朋運動  
和讃における親鸞の女人往生観と三十五願について 岩本智依  
法要の形式と同朋運動 岩崎博敏  
法衣の色に関する一考察～大遠忌が私に問うていること～ 井上慶永  
基幹運動総合基本計画解説書『ともに』を読む 小笠原正仁  
近世真宗差別問題史料 7 「申物留帳」「御染筆申物留」「(仮称)御名号類御染筆被下留」「御染筆物願人留」 左右田昌幸  
[奈良県立同和问题関係史料センター]研究紀要 17号(奈良県教育委員会刊, 2012.3)  
戦間・戦時体制期奈良県の被差別部落の状況について 井岡康時  
地域的霊場の成立と展開 高山新八十八ヶ所をめぐって 津浦和久  
続「三棟」考 中世奈良の声聞師を考える 山村雅史  
19世紀大和における真宗フォークロアの生成 吉光尼伝承のゆくえ 奥本武裕  
鹿の角切りと奈良の町 幡鎌一弘  
ねっとわーく京都 276(ねっとわーく京都21刊, 2012.1): 500円  
戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか 元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 3  
ねっとわーく京都 279(ねっとわーく京都21刊, 2012.4): 500円  
戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか 元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 4  
ヒューマンJournal 199(自由同和会中央本部刊, 2011.12): 500円  
部落解放運動40年を振り返って 2 差別問題を考えだしたころ 灘本昌久  
ヒューマンJournal 200(自由同和会中央本部刊, 2012.1): 500円  
部落解放運動40年を振り返って 3 左翼運動としての部落解放運動 灘本昌久  
ヒューマンライツ 286(部落解放・人権研究所刊, 2012.1): 525円  
大阪W選挙と週刊誌ジャーナリズム 橋下氏勝利の立役者は、「週刊新潮」「週刊文春」ではなかったのか 赤井隆史  
私の「変わり目」15 右往左往する人生 土肥いつき  
ヒューマンライツ 288(部落解放・人権研究所刊, 2012.3): 525円  
パネルディスカッション 水平社宣言と90年の運動からまなぶもの 北口末広, 組坂繁之, 武者小路公秀, 友永健三  
ひょうご部落解放 143(ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2011.12): 700円  
部落解放研究第32回兵庫県集會報告書  
部落解放 655号(解放出版社刊, 2012.1): 630円  
特集 よりよい「生命」とは何か  
「障害者が生まれるから」原発はいけないのか 野崎泰伸/出生前診断に向きあうために 松永真純/どこまでが「健康」なのか 八木晃介  
本の紹介  
『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』(和歌山人権研究所著/和歌山の部落史編纂会編) 中尾健次/『ふくしま2011、沈黙の春』(八木澤高明著)/『解放令の明治維新 賤称廃止をめぐって』(塩見鮮一郎著)/『優生思想と健康幻想 薬あればとて、毒をこのむべからず』(八木晃介著)/『大丈夫。がんばっているんだから』(渡井さゆり著)/『障害と文学 「しのめ」から「青い芝の会」へ』(荒井裕樹著)/『内なる他者のフォークロア』(赤坂憲雄著)  
韓国歴史ドラマに描かれた身分制と被差別民衆 朝治武猿・縁・奇縁 対談 村崎修二が訪ねる 4 猿と太鼓 青木孝夫, 村崎修二  
まちかどの芸能史 12 絵解き 村上紀夫

- 長谷川洋子  
花とマグマ 絵と詩 森永都子  
濃水飛山記 藤田敬一  
こべる 227 (こべる刊行会刊, 2012.2) : 300円  
自分史のこころみ 10 「部落・在日・障害者」問題との三十七年 高田嘉敬  
尼崎だより 39 人が生きていく上で大切なことを体感させる 中村大蔵  
いのちを生きる 48 Nとの「再会」 長谷川洋子  
<幻の銀河> 写真と文 小林茂  
濃水飛山記 藤田敬一  
こべる 228 (こべる刊行会刊, 2012.3) : 300円  
部落問題とわたし 3 父との葛藤を通して考えてきたこと 住田一郎  
四日市から 23 昭和歌謡に誘われて 坂倉加代子  
いのちを生きる 49 原発をどう教えるか 長谷川洋子  
<幻の銀河> 写真と文 小林茂  
濃水飛山記 藤田敬一  
こるむ 8号 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2012.1)  
朝鮮学校の歴史 7 大学入学 (受験) 資格問題 金東鶴  
こるむ 9号 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2012.2)  
朝鮮学校の歴史 8 大学入学 (受験) 資格問題 2 金東鶴  
狭山差別裁判 428号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2010.11) : 300円  
野間宏と寺尾判決 6 庭山英雄  
狭山差別裁判 429号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2010.12) : 300円  
野間宏と寺尾判決 7 庭山英雄  
狭山差別裁判年間総目次 418号~429号  
人権と部落問題 824 (部落問題研究所刊, 2012.1) : 630円  
特集 震災・原発と子どもの人権  
文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 非人の短歌 (上) 小原亨  
兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 10 初当選~連続6期24年 南野昭雄  
人権と部落問題 825 (部落問題研究所刊, 2012.2) : 630円  
特集 アイヌ民族の現在  
現地報告広島市 ウソで固めた「原爆と差別」の講演 「解同」人権講座内容を批判する 森岡宏壽  
文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 非人の短歌 (下) 小原亨  
兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 11 補記 1 南野昭雄  
人権と部落問題 826 (部落問題研究所刊, 2012.2) : 1,155円  
特集 住民自治と同和行政の終結  
2010年度版大阪府『人権問題に関する府民意識調査報告書』の特徴と問題点 石倉康次  
部落解放同盟の改正綱領を読む  
部落解放同盟新綱領についての一考察 問題解決の到達目標は明らかになっているか 奥山峰夫 / 現実からの逃避 部落民アイデンティティ論に固執 尾川昌法  
資料紹介 人権教育の推進に関する取組状況の調査結果について 梅田修  
人権と部落問題 827 (部落問題研究所刊, 2012.3) : 630円  
特集 教科書が変わる 中学校  
兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 12 2011年から2012年へ 南野昭雄  
本棚 藤本清二郎著『近世身分社会の仲間構造』 森下徹  
文芸の散歩道 同人誌『処女地』の作品 2 辻村乙未 「無花果の村」など 川端俊英  
第49回部落問題研究者全国集会の報告  
季刊人権問題 366 (兵庫人権問題研究所刊, 2012.1) : 700円  
八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 4 八鹿高校事件の真実 解同・憲法・共産党 古賀哲夫  
中学校公民教科書の部落問題記述の問題点 亀谷義富  
振興会通信 102号 (同和教育振興会刊, 2012.1)  
同朋運動史の窓 10 左右田昌幸  
神女大史学 28号 (神戸女子大学史学会刊, 2011.11)  
都市社会事業の展開と地域社会 1920年代後半~30年代の京都市の場合 松下孝昭  
月刊スティグマ 186 (千葉県人権啓発センター刊, 2012.1) : 500円  
報告 2011年10月 中学・高校生「インターネット差別書き込み」認知度調査報告 鎌田行平  
月刊スティグマ 188 (千葉県人権啓発センター刊, 2012.3) : 500円  
連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 鎌田行平  
月刊地域と人権 334 (全国地域人権運動総連合刊, 2012.1) : 350円  
特集 第7回地域人権問題全国研究集会 (第5分科会) 報告 身分制・部落問題についての研究と教育の前進 小牧薫  
月刊地域と人権 335 (全国地域人権運動総連合刊, 2012.2) : 350円  
特集 同和问题セミナー報告  
地域と人権 1107号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.12) : 150円  
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 17 丹波正史

山口公博が読む今月の本

『来世は野の花に 鎌と宇宙船2』（秋山豊寛著）/  
『「しがらみ」を科学する 高校生からの社会心理学入門』（山岸俊男著）/  
『ふかいことをおもしろく 創作の原点』（井上ひさし著）

部落女性アンケート調査2

全国部落史研究会 全国水平社創立90周年記念シンポジウム

解放新聞大阪版 1902号（解放新聞社大阪支局刊，2012.1.2・9）：70円

新春還暦放談 小野栄一，河内幸治，富田一幸，松山精助，山根健二

解放新聞大阪版 1904号（解放新聞社大阪支局刊，2012.1.30）：70円

貝塚の公立と畜場が閉鎖へ 浅居明彦

解放新聞改進黨版 422号（部落解放同盟改進黨支部刊，2012.2）

竹田の子守唄を題材にした人権学習について 北村淳

解放新聞京都市版 244号（部落解放同盟京都市協議会刊，2012.2）：150円

水平社90年に思う～部落解放運動往来～ 井本武美さん

解放新聞京都市版 245号（部落解放同盟京都市協議会刊，2012.3）：150円

京都市いきいき市民活動センター探訪～指定管理から1年の現状を聞く～

解放新聞東京版 783号（2012.3.1）：90円

「新・部落差別はなくなったか」をめぐる著者塩見鮮一郎さんと話し合い

解放新聞兵庫版 768号（解放新聞社兵庫支局刊，2012.1.1）：50円

伝えたい地域の文化 姫路・長野支部 「立花」

架橋 26号（鳥取市人権情報センター刊，2012.3）

特集 全国水平社創立90年を迎えて

鳥取県水平社運動史研究の現状と課題 西村芳将 / 全国水平社創立大会宣言が受け継いだころ 守安敏司 / 「水平社宣言」と私 朝治武 / 熱と光を灯して 山崎裕佳 / 水平社宣言に思うこと 田川朋博 / 『民衆自身の手による人権宣言』～水平社宣言から90年に思う～ 森田孝明

講演録 「ふつう」であるという世間体～...する人、...される人、...ふつうの人～ 好井裕明

語る・かたる・トーク 202（横浜国際人権センター刊，2011.12）：500円

原発と人権 6 吉本隆明批判 江嶋修作

語る・かたる・トーク 204（横浜国際人権センター刊，2012.2）：500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 1 起き上がり小法師 外川正明

語る・かたる・トーク 205（横浜国際人権センター刊，2012.3）：500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 2 新採二日目に知ったランドセルの中 外川正明

カトリック部落差別人権委員会ニュース 137（日本カトリック部落差別人権委員会刊，2012.1）

部落民と差別 福岡ともみ

かわとはきもの 158（東京都立皮革技術センター台東支所刊，2011.12）

靴の歴史散歩 103 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学人権問題研究室紀要 63号（関西大学人権問題研究室刊，2012.3）

大坂町奉行吟味伺書の考察 1 藤原有和

部落問題と日本における人権規約の社会的適用 吉田徳夫，トーマス・ウィリアム・ウィルソン

ビルダーボーゲンに見る家庭観 宇佐美幸彦

児童養護施設における暴力の実態 A県管轄下の全施設調査から 多賀太，山口季音，狩野博美，吉田由似

現代の大学生は戦争に関して何を学んできたか 「ジェンダーで読み解く戦争」受講者調査から 守如子，豊田真穂

部落解放運動における隣保事業の役割 住吉地区・住田利雄を中心に 住田一郎

西光万吉の自己形成 2 初期の「論説」等を手掛かりにして 宮橋國臣

紀州経済史文化史研究所紀要 32号（和歌山大学紀州経済史文化史研究所刊，2011.12）

天保期における城下町「溜」の性格と機能 和歌山の場合 藤本清二郎

教化研究 150（真宗大谷派教学研究所刊，2012.1）：1，200円

特集 『教化研究』の歩み

『教化研究』1号～149号総目次

グローブ 68（世界人権問題研究センター刊，2012.1）

法然・親鸞と今 平雅行

韓国における家庭暴力の防止と処罰 金東勲

下村文六のひとり言 辻ミチ子

書評

『アイヌ・台湾・国際人権』（安藤仁介）坂元茂樹 / 『朝鮮通信使と京都』（仲尾宏）盧桂順

人権の“館” 長崎県立対馬歴史民俗資料館

こべる 226（こべる刊行会刊，2012.1）：300円

自分史のこころみ 9 人民・部落・革命、そして.....

福岡ともみ

四日市から 22 高知で村木厚子さんの講演を聴く 坂倉加代子

いのちを生きる 47 「変な感じの集まり」に参加する

# 収集逐次刊行物目次 (2012年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 朝田教育財団だより 16 (朝田教育財団刊, 2012.1)  
朝田教育財団30年の歩み 森本弘義  
明日を拓く 91・92 (東日本部落解放研究所刊, 2011.11) : 2,100円  
特集 内田雄造・前理事長を追悼する  
座談会 部落のまちづくりと住民、プランナー・研究者  
内田雄造氏を追悼して 大谷英人、山本義彦、池谷啓介、西村憲一 / 戸波のまちづくりと内田雄造さん・若竹グループとの出会い 武森徳嗣、西村宏子、西村幸恵、西村憲一  
IMADR-JC通信 169 (反差別国際運動日本委員会刊, 2012.3) : 750円  
特集 差別の壁を打ち破れ アジアにおけるカーストと部落の連帯  
ウィングスきょうと 108号 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2012.2)  
図書情報室新刊案内  
『2人が「最高のチーム」になるワーキングカップルの人生戦略』(小室淑恵、駒崎弘樹著) / 『ガール・ジン「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』(アリスン・ピープマイヤー著)  
解放教育 530 (解放教育研究所編, 2012.1) : 770円  
特集 現代社会の現実と解放教育の課題  
解放教育 531 (解放教育研究所編, 2012.2) : 770円  
特集 解放教育の核心と水脈  
月刊「解放教育」終刊のお知らせ  
解放教育 532 (解放教育研究所編, 2012.3) : 770円  
特集 解放教育運動の未来を展望する  
資料 特集名にみる『解放教育』誌のあゆみ (創刊号～532号)  
解放新聞 2548号 (解放新聞社刊, 2011.12.19) : 80円  
解放の文学 68 江成常夫『鬼哭の島』 音谷健郎  
解放新聞 2549号 (解放新聞社刊, 2011.12.26) : 80円  
山口公博が読む今月の本  
『電力と国家』(佐高信著) / 『悲しみは憶良に聞け』(中西進著) / 『変身・断食芸人』(カフカ作)  
福岡県人権研究所 部落史研究の財産継承し公開へ  
解放新聞 2550・2551合併号 (解放新聞社刊, 2012.1.2) : 160円  
沖浦和光さんに聞く  
筑豊と部落 山本作兵衛が描く世界 安蘇龍生  
解放新聞 2552号 (解放新聞社刊, 2012.1.16) : 80円  
山本作兵衛さんの日記を<読む> 森山沾一  
解放新聞 2553号 (解放新聞社刊, 2012.1.23) : 80円  
解放の文学 69 西光万吉起草「水平社宣言」 音谷健郎  
山本作兵衛さんの炭坑画と識字 堀内忠  
解放新聞 2554号 (解放新聞社刊, 2012.1.30) : 80円  
フィールドワーク「洗染一揆に学ぶ」  
今週の1冊 『こんなに変わった歴史教科書』(山本博文ほか著)  
解放新聞 2555号 (解放新聞社刊, 2012.2.6) : 120円  
2012年度一般運動方針 (第1次草案)  
解放新聞 2556号 (解放新聞社刊, 2012.2.13) : 80円  
山口公博が読む今月の本  
『脱原発・再生文化論』(川元祥一著) / 『なほになほなほ 私の履歴書』(竹本住大夫著) / 『大阪芸名作選』(富岡多恵子編)  
解放新聞 2558号 (解放新聞社刊, 2012.2.27) : 80円  
解放の文学 70 「戦場」も時代の延長 火野葦平ら『戦争×文学』 音谷健郎  
部落女性アンケート調査 (報告概要) 1  
解放新聞 2559号 (解放新聞社刊, 2012.3.5) : 120円

## 事務局よりお知らせ

今年度の部落史出張講座の日程と内容が決まりました。今回は壬生地区の歴史について、地元のセンターにて2回開催します。是非ふるってご参加下さい。尚、11月・12月に連続講座を4回開催する予定にしています。

昨年度の部落史講座の講演録ができあがりしました。ご希望のかたは、メール(qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp)でご連絡ください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分